[証言3]

宮城県共産党と仙台の在日朝鮮人社会

高橋正美さんと遠藤忠夫さんのお話

上述のように、一九四八年一〇月一一日～一二日、宮城県仙台市において、在日朝鮮人たちは、朝鮮民主主義人民共和国の建国を記念して、祝賀運動会を開催した。このとき、「国旗掲揚事件」が起こっている。

一九九五年一一月二九日、本研究会は、高橋正美さん（「国旗事件」当時、日本共産党宮城県委員会事務局兼、朝鮮人部部長）と遠藤忠夫さん（同事件当時、日本共産党宮城県委員会委員長）を招いて、この事件とその周辺、背景についてお話をうかがった。おふたりは、「国旗事件」と呼んでいるが、「掲揚」に到っていない緊迫した事態が伝わってくる表現である。ここでは、いずれかに統一しないまま、各発言者の表現にしたがった。

なお、おふたり以外の発言者は、本研究会の岩城正夫（I）、針生一郎（H）、三橋修（M）、ユ・ヒョチョン（Y）、李癸娘（E）、ロバート・リケット（R）、篠原睦治（S）である。

（篠原睦治）

私の党活動と朝連――高橋正美

戦後、故郷で朝連と

私は一九四五年一一月に神奈川県で共産党に入党して、一九四六年一月から宮城県北の山村地帯にある故郷（栗原郡栗駒町）を中心に青年、文化活動を通じて民主化運動に専念しました。四月、母校の推薦で日本金属工業（株）仙台工場に入社したのです。これを機会に本格的な労働運動に取り組もうとしていた矢先、県幹部から栗原地区に党組織を作ってほしいとの指示を受けました。迷ったあげく、九月で退社、一〇月から約一年間にわたり党員皆無の栗原地区での組織確立に心血を注いだのですが、その結果、郡内町村の七割に細胞が誕生して、一九四七年一〇月念願の地区委員会が結成されました。

一九四七年一一月、県委員（事務局員）に推され仙台に行って、一九四八年一月～一二

月まで常任委員として朝鮮人部をも担当することになりました。

当時、強制労働から解放された東北、北海道の朝鮮人は続々と宮城に集まって、その数は約六〇〇〇人に達しましたが、自由の身になったとはいえ、定職を失った彼らは住居、食糧、医療、子どもの教育などでそれぞれが深刻な問題を抱えていたのです。人里離れたバラック小屋、ボロボロの借家に住みついた彼らは戸ごとに鉄屑、ボロ布古紙類を買い集めて、ヤミ米を都会に運ぶ「カツギ屋」稼業を日常的に行なって、夜ともなると暗いランプの下でさまざまな飴菓子や餡を造りました。また、木陰、森、縁の下に埋められた一〇数個のカメでドブロクを醸造して、それらを仙台のヤミ市街や飲食街に組織的に売りさばいていました。こんな毎日が彼らの極限の生活を支えていたのです。

党活動

党中央で一九四六年二月に中央委候補に選出された朴恩哲氏が朝鮮人部を担当していましたが、在日朝鮮人問題に関する具体的な方針、指示は全くなかったのです。

したがって私は隠退蔵物資摘発などで常に朝連〔在日本朝鮮人連盟〕と共闘していた前・県委員長（川原清秀）のアドバイスを受けながら朝連支部の現況把握に努めて、地区、細胞を訪れては市町村に対する朝連の生活援護闘争に積極的に参加して、支援することを要請しました。朝鮮人たちは農村地帯にも住んでいましたが、山間部に行って掘っ建て小屋をつくって、ドブロクを密造していました。そして我々と一緒にそれを組織的に集めて仙台で販売していきました。その仲介役は朝鮮人部の仕事でした。

また朝連に対しては、党が行なう反税、供米強権発動抗議などの対権力闘争の、ビラ貼り、チラシ配りなどの協力も要請しました。たとえば、明日、こういう集会、職の確保運動などがあるから何人を動員してくれるような指令を出したりしました。朝鮮人たちはそれに忠実に応じてくれました。そうした連帯行動のなかで日常革命を担う党と朝鮮革命の一翼を担う朝連との相互理解を促して、信頼、連帯感を深めてゆきたいというのが私の願いだったし、基本的な考え方でした。

末端細胞員の生活を脅かした一九四八年の職場闘争、疑心暗鬼が横行して、党組織を解体直前に追い詰めた一九五〇年、分裂による党内分派の権力闘争、あげくのはてに組織と党員に壊滅的打撃を与えた無責任きわまる武装闘争などなど、これらに終始批判的な立場であり続けた私には、当然ありとあらゆる中傷とレッテルが貼られたのです。

一九五一年以降の共産党の軍事方針は五年間続きましたが、朝鮮人たちは本当に苦労しました。党の会員名簿をつくったり、非合法となっていた『赤旗』という党機関紙などを運搬したり、配布したり、実力闘争も含めてさまざまな地下活動の先頭に立って精一杯にやりました。

一九五五年八月、全財産と全青春をかけた党生活に疲れはて離党しました。以後家業の再建に努める傍ら町議（一期）、監査委員（一期）などの数々の公職についたのですが、一九六四年新たなる活動の場を求めて仙台に移住して、一九八五年、年金受給を機にすべての職を退いて、現在は蓄積した経験を生かして、反戦平和、反差別、反核、反天皇制を貫くために市民運動に取り組んでいます。

私と朝鮮人の関わり——遠藤忠夫

あの頃、朝鮮人は祖国建設を本当に喜んでいました。

私は、敗戦の日、仙台鉄道局の施設部建築課にいました。当時、仙台の中心街はほとんど焼け野原で、鉄道局も空襲で焼けて、東北学院中学部のレンガ建ての焼け残りにその仮庁舎がありました。敗戦の日から一週間くらいたって、そこの掲示板に局長辞令が出ました。従業員組合委員長は労働課長何の某、書記長は労働課員何の某と。従業員組合は自主的に組織するもので、局長辞令はおかしいと、労働組合革新連盟という名前で、全従業員が集まりました。

私が共産党に入ったのは、一九四五年一二月でした。その後、読売争議のもとになる「読売新聞」仙台支局の記者たちが、労働組合の作り方を私たちに教えてくれたのです。

こうして、当局の組合委員長などを無視する動きをはじめたとき、局長は私を呼び出して、「たしかに君のいうとおりである。組合については君たちにまかせる」といって、局長辞令を一切撤回しました。このときから国鉄労働運動に首をつっこむようになって、一九四七年の二・一ゼネスト闘争のときには最年少の中央闘争委員でした。

二・一闘争後、私は労働組合の役職につくことを一切拒否して、共産党の下部の細胞を国鉄内に組織することを考えはじめたのです。私は県党会議の代議員にもならないで党の会議を無視していましたが、東北地方の責任者である春日庄次郎が、ともかく県委員会に入れと強引に委員にし、そして戦前からの人たちの多くを排除して、私を県委員長にしました。それ以降、高橋さんとか、二高を中退した若い人たちと活動していきました。

朝鮮人との出会い

話は戻りますが、朝鮮人について幾つかの忘れ難いことがあります。例えば、敗戦の年の一〇月一〇日、徳田球一や宗教家など治安維持法関係者が東京府中の刑務所から出てきましたが、この日私は、宮城刑務所の前の桜並木でボンヤリと立っていました。刑務所からは、一人ひとりポツン、ポツンとしばらくの間をおいて出てきましたが、彼らを出迎えていたのは、日本人ではなくて、朝鮮人だったのです。当時マツダ三輪トラックというのがありましたが、それに卵を山と積んで新聞紙にくるんで、日本人一人ひとりに「ご苦労さまでした。これで元気を出してください」と言って、渡しているのです。敗戦前に三・一五とか四・一六とかいう事件があって、[*1]そのときの報道が、不精髭を生やした極悪非道なものが捕まえられたとなっていましたので、このときもそんな風貌かと思っていたら、解放ということで髭をそってショボショボと出てきました。それに先んじて、九月に朝連宮城県本部が出来たばかりでした。

一九四八年の三月前後に、やはり朝鮮人たちの導きで、共産党の創立者のひとり、市川正一の遺骨を奪還する事件がありました。これは私が、朝連が経営する朝鮮人学校に、県委員長として時事問題の懇談に招かれたときからはじまります。ここに来ていた東北大学医学部の朝鮮人学生が、死体解剖のために身体を提供している人は誰かということで、昔

の戸籍謄本風の遺体の原本を見ていましたが、そこに「市川正一」の名があったんです。当時、『日本共産党闘争小史』という薄っぺらな文庫本が出るか出ないかのときだったのですが、朝鮮の人はさすがと思いました。

そこで七人の学生が、とりくんでいた解剖をストップして、「市川正一の骨ではないか」と言いながら、私のところへ来ました。私は、すぐにかつて宮城刑務所にいた春日庄次郎を訪ねて、いくらなんでもコミンテルン執行委員を解剖に出すはずはないと、しかも弟が健在なのだから、遺族に連絡しないはずがない、と言いました。翌日、春日庄次郎、統制委員の増田格之助、そして私が宮城刑務所に行きました。所長は交替していて、知らぬ存ぜぬだったのですが、そこへひょっと入って来たのがここの課長で、増田が水戸刑務所にいたときの看守でした。課長は早速調べてくれましたが、その結果、市川は敗戦の年の三月一五日に獄死して、一週間後に東北大学に遺体として流されたと分かりました。

それで私は、東京から市川の弟を呼んで、ホルマリンのプールの死体保存室に入りました。あまりに異常な臭いで他の人は出てしまいましたが、私は責任上、プールから係官の手によって遺体が上がるまで見届けたのです。写真で見ていた骨格から判断して市川ではないかと思いましたが、弟に見てもらったら、弟は左足の親指を見て、子どものときの怪我の痕があるというので、市川の遺体であると確認しました。東北電力の講堂を借りて党葬をやって、中央にもっていきました。今はそのお墓は八王子にあります。この事件のきっかけも、やはり朝鮮の青年だったのです。

国旗事件

国旗事件が起こる一九四八年頃までは、週末になると、仙台駅にアメリカ軍の十数名が集まって、そこから赤旗を立てて、県党委員会まで激励に来るんです。聞いてみると、彼らはもともとアメリカの産別会議の労働者などで、そのとき、チョコレートとかペニシリン、マラリヤの特効薬、虫下しをもってきてくれました。県党委員会は、仙台市五つ橋の裏の小さな掘っ建て小屋のようなところにありましたが、子どもたちもだんだん馴れて日曜日になると、ウワッと集まって来て、占領軍からの菓子類の分配にあずかりました。

次に、国旗問題ですが、北朝鮮［朝鮮民主主義人民共和国］の国旗の扱いについては、いろいろな噂が入っていました。直接私のところへは、当時の県知事である千葉三郎からでした。千葉三郎は、後に自民党では、一番右になった人ですが、そのときは宮城県知事でした。一〇月一〇日、五つ橋にあった、焼け残りの小学校の雨天体操場でだったと思いますが、彼は私を呼んで「第八軍との関係を共産党はよろしく頼む」と言ったんです。このときは、朝連主催の建国祝賀会がはじまろうとするときでしたが、私は、第八軍司令部から来ている二世の人から、軍の命令ということで、「北朝鮮の旗は会場に展示することはいかん」と言われました。「なぜ」ときくと、「アメリカは北朝鮮を承認していないから」と答えました。それで私は、県知事が傍にいましたが、「日本の旗はアメリカが承認した旗だから立っているのではない。労働組合の旗もそうです。そんなことをいちいち言うのは何事か」と反論しました。押し問答の末、開会まで正面にかけておいて、司会者が「これから始めます」と言ったら、それを降ろすことにしました。この頃、知事は、朝鮮人

のいろいろな集会に祝辞をもっていくのがしきたりだったんです。ともかく県知事は朝鮮人の活動に対して、「さわらぬ神にたたりなし」という態度でした。

その翌一一日も、朝連主催の運動会でした。宮城県では朝連がまだ南北に分裂する以前のことでした。場所は東北大からずっと下りて行った広瀬川の河原のグランドでした。高橋さんは、その準備に奔走していました。朝連青年部の人たちは、長年祖国をもたなかった民族が初めて祖国をもつという、そのときの旗を、なんとか揚げようと強硬でした。

基本的には「挑発に乗るな」ということだったんですが、余りにも熱心なので、一二日の運動会の一番最後にということで、私がウンと言ったとたん、共和国の旗がひるがえりました。それと同時にパンパンと水平射撃が起こったんです。私の記憶では負傷者は六、七人でした。医者は全部警察に届けなくてはならないことになっていましたが、そうなると、全員逮捕されてしまいますので、これはなんとか避けなくてはならなかったんです。

岩本病院は若干シンパ的なところがありましたが、今野外科病院はそうはいかなかったのです。しかし院長が仙台一中の私の先輩だったので、すっ飛んで行って、弾の摘出と負傷の治療だけにしてほしいと頼みました。すると、うちでは、カルテを一切作らない、その代わり、あなたが責任をもってくれ、と言われました。阿部外科は警察に届けたので、二人のうち、一人が退院と同時に捕まりました。もう一人は朝鮮人連盟の青年たちがお見舞いという形で連れ出しました。その結果、一人の逮捕者と朝連の責任者二人が、確か沖縄に重労働に行かされたんです。

当時の資料では、アメリカ軍に抵抗したような書き方がありますが、国旗が翻ったのは祖国建設に対する情熱のゆえであって、アメリカ軍に抵抗したなどということでは決してありません。むしろ、旗を開いた瞬間にどこにこんなにいたかと思うくらい、制服制帽の警察とMP〔米軍の憲兵隊〕がグルになって、水平射撃をしたんです。私のまわりを朝鮮の若い人たちが取り囲んでくれて、私を逃がしてくれたことなど、忘れられない思い出です。

この事件について、『河北新報』、『毎日新聞』、『夕刊東北』などが報道しましたが、まったくウソの記事でした。『赤旗』は、あの事件は共産党は関係ないと言うために書いていますが、実際はあの事件の責任は県委員長である私にあることだけは確かです。ピョンヤンでもあの事件の評価が一致していないようで、あるとき、朝鮮労働党の中堅幹部が、私が責任者だと知らないで、宮城県の国旗事件は挑発に乗ったけしからん事件であると話していました。そのとき、私は次のように答えました。

「朝鮮の人たちは、あのときに祖国を建設できたというので、本当に喜んだんです。南には、大韓民国ができましたが、アメリカの占領軍がいました。しかし、北はソ連、中国が三八度線まで来てサッと引いて軍事顧問と金日成だけになりました。だから、日本にいる朝鮮人から見ると、南とか北とかじゃなくて、我々の民族が国を作ったということで非常に感激していました。そして、あのときの責任者は私だったんです」

すると、彼はびっくりしましたが、その後、私に会いにくることはなくなりました。私は当時の朝鮮の若い人たちの祖国建設に対する感激を抑えることができませんでした。彼らは運動会の二日目、開会直後から入れかわり立ちかわり、私にOKを取るためにやってき

ました。運動会の最後ならということで、OKしたとき、彼らが喜んでいたのを忘れられません。その意味で、朝連は共産党の指令に忠実に従っていたのです。

その後、朝鮮労働党内部での評価が分かれているようですが、なぜかあの時のあの旗がピョンヤンの記念館に保存されているらしい。一度見に行こうと思っていますが、私のピョンヤン行きはまだ実現していません。

「平事件」

国旗事件の後、一九四九年六月三〇日に福島県平市で事件があって、それから間もなく同県の松川事件も起こりました。[*2] 私は、「平事件」とは何だったんだと、あれは闘争だったのかと、共産党の当時の幹部と喧嘩をしはじめました。

事件直前に東北地方の党会議があって、その指導に野坂参三などが来たんです。だが、会議では変な雰囲気になりました。それは共産党の細胞の人数の何倍動員できるかという問題提起があったからです。平市は炭坑労働者も、朝鮮人もたくさんいたところです。その近くには漁港もあります。それで平市の連中を大きく動員することにした、これが「平事件」のはじまりです。

[その背景に]食糧事情が悪かったこともあります。平の連中は漁村に行って、三〇〇匹の魚を集めたんです。事件の前の日に「わが党は魚を販売いたします」というチラシをばらまきました。そしたら集まったのは三〇〇〇人を越えた人びと。ところが三〇〇匹の魚しか用意していないので、彼らは、それを「魚がみなにいきわたらないのは、警察がヤミ取り引きを許さないからだ」と言って、三〇〇〇人を連れて平市警察に押しかけたのです。そして警察署を占拠して、ブタ箱を全部開けて署長をブタ箱に入れました。それで赤旗を平署の前に揚げて、万歳、万歳という馬鹿なことをやりました。それが内側から見た「平事件」です。

私は、こんなのは闘争と言えるかと、東北地方の党議長に喧嘩を売りました。それで宮城県委員長を活動停止になり、仙台から出てはいけないという禁足令になりました。秘密に東北六県委員長が集まって「平事件」について討論しました。こうなれば、党政治局に直訴するしかないことになって、私は東京の共産党本部に行って直訴したのです。その結果、東北地方の党議長が党本部に召還されて、私も本部勤務（財政部）になりました。

その後、私は一九五〇年に党から除名され、一九五五年～八三年まで東京の神田で市民運動などの各活動の文献を揃えたウニタ書舗を経営してきました。

質疑応答

MPも警察も撃った

高橋　当時のブル新［ブルジョア新聞］などは、一発を撃ったとなっていますが、そうではないのです。パッパッパッパッパ、パパーンと、一〇発ぐらいかな。空に撃ったのもあるしね。五、六人に当たったのは、事実です。

遠藤　逮捕者が一名ですから、一発で数が合うというわけですが。

―M　実際に撃ったのはMP、日本の警察どちらでしたか。
高橋　MPです。
遠藤　いや日本の警察も確かに撃っています。
―M　どちらの弾にあたったかは分からないんですね。
―E　それは、民事裁判で、ある朝鮮人が、一人の黒人が撃ったと発言しています。だから、裁判では黒人一人になっています。
高橋・遠藤　実際は一人ではないんです。
高橋　それがどの資料も一発になっています。警察発表を根拠にしていて『宮城県労働史』もそう書いています。
―R　GⅡなどの情報部の調査報告も一発となっています。米軍の第九軍団のなかでも黒人の憲兵隊がありましたので、宮城県軍政チームは第八軍本部から事実を隠した可能性もあります。黒人による憲兵部隊ですが、将官たちは白人です。
遠藤　私は直接水平撃ちをされる前にいたわけで、朝鮮の若い人が周辺を取り囲んで防衛してくれました。一人なんてものじゃない。どこにこんなに隠れていたかと思うくらいMPと警察がいたのです。
高橋　五〇メートルぐらいの範囲で、パパパーンとやったんだからね。そりゃ威嚇射撃もあるんでしょうが。
―　あの当時、日本の警察が使っていたピストルは、アメリカ製のものですね。
―M　そうです。五人に一人の割合で日本の警察にも銃が行き渡ったころです。

国旗禁止令は前日に知らされた

―E　一一日の祝賀運動会に対して、GHQから「旗を出すのはいけない」という指令が出されたのは、二日前の一〇月八日です。実際は、前日になって知事が遠藤さんに伝えていますね。
遠藤　そうです。一〇日に私が千葉三郎知事に呼ばれて、第八軍が国旗掲揚禁止命令を出しているから、「共産党がなんとかしてくれ」と言われたんです。知事はそっとしておきたいわけです。しかし、それには前提があったわけです。一九四八年の五月一日にメーデーがあって、県知事との団体交渉がありました。そのとき、私が調整役をやったら、翌日県知事の秘書から「知事に会いに来てくれ」という電話があったんです。知事に会ってみたら、「共産党をやめて俺の秘書になってくれないか」と言うのです。そういうことがあって、国旗問題が起こったときに、千葉知事に「なんとかしてくれ」と頼まれました。
高橋　だから、前の夜に、朝鮮の若い人たちに取り囲まれて談判されました。そのとき、そういう話がボコッと出ましたが、私は知らなかったんです。その時点では、県党としては確認していません。
―R　警察からは、なんらかの連絡が入ってなかったんですか。
遠藤　あの当時は、米軍の日系二世の人が中心で、警察は付き添いで来るくらいだったんです。でも事件が起こったときにはピストルを撃ちましたけどね。ぼくの記憶では、水平射撃でした。ただ、なかには当たらないように撃っていた警察官もいたことはうろ覚えにあります。とにかく、ぼくは、これは当たる、やられるなあ、という感じをもちました。
高橋　あの雰囲気はね。委員長が言うとおりです。
―M　片方は川ですが、ほとんどグルッと囲まれたんですか。
高橋　そうです。川にそって土手がずっとあ

って、MPと警官がそこに立っていました。
遠藤　私が、旗を開くのにOKを出したときには、彼らの姿は見えなかったんです。ところが、若い人たちが喜んでやった途端、どこにこんなにいたのかと思うくらい、ウワーッと出てきたんです。
高橋　ジープが二〇台以上は来たからね。

朝連、民団の解散と反税闘争

―R　一九四九年九月に朝連が解散させられましたが、それに対して、宮城県の共産党はどうでしたか。
高橋　四九年四月公布されたばかりの団体等規正令で、朝連はその九月に解散させられたんですが、その後［一九五五年に］朝鮮総聯［在日本朝鮮人総聯合会］という形で合法化しました。そのときは、特別なトラブルは起きなかったと思います。
―R　GHQの論理というか、政府の言い方だと、解散の理由の一つは、国旗掲揚事件という大変なことをやったからだということになります。ただ、朝連だけでなく、宮城県の民団［在日本大韓民国居留民団］本部も解散させられました。全国的でなく、宮城県の民団だけなのですが、それはなぜでしょうか。理由が国旗掲揚事件なら朝連だけのはずなのに。
―E　国旗掲揚問題を機に朝連の内部問題は全部表面に出たと思います。一九四九年に入ると、朝連内に分裂があったり、朝連と民団の間に傷害事件も起こったりしたのですが。
遠藤　今風に言うと朝連と民団とは、北と南という思想上、国家体制上の問題がありますが、現実問題として一九四九年ごろから朝鮮人にも日本人と同等というか、同等以上の税金をかけてきたんです。税務署が地域ごと、職業ごとに、頭からバーッとかけてきて、朝鮮人部落では非常にそれが重荷になっていました。そこで、宮城の党は、八木山で税金の会議をやっていると聞けばそこに乗り込んで、資料をメチャクチャにしたりという闘争をしました。このような反税闘争では、民団も朝連もなく闘ったから、それで両方解散となったのではないでしょうか。

ドブロクの取り締まりと配給制度

―R　ドブロクの取り締まりはいつごろはじまって、どのように対応したんですか。
高橋　一九四八年以前からありました。とにかく戦後、朝鮮の方々が生きるにはそれしかなかったんです。
―E　そのとき、県の共産党は、朝鮮人側に協力したんですか。
高橋　彼らを救うには、協力せざるをえませんでした。たとえば彼らが病気になれば、党のシンパの医者に頼んで、なんとかしてもらいましたし、そういう世話役が我々の大きな役割でした。
―M　配給制度で朝鮮人に対する優遇ということがあったんですか。僕は、ドブロクだけで生きるのではなく、連合国なみの配給がどこかで紛れこんでいたのではないかと疑っています。台湾人は明らかにGHQと同じ扱いで、大変いいものが配られているのですが、間に挟まれた朝鮮人たちの配給制度は、日本人とは違っていなかったんですか。
高橋　仙台に小田原とか原の町という朝鮮人密集地がありますが、ここで、一九四六年にドブロクの一斉の手入れがあったんです。大部挙げられたんですが、そのときの県の言い分は、日本人よりも何合とか米を余計に配給したということでした。それをヤミ米として売って、ドブロクを作る材料費にしたというこ

とで、県が我々に対応したことがありました。

―E　刑事側の資料から言うと、国に帰るということで、特配をしたようですが。それは一九四六年まででしょう。

高橋　それは間違いないです。それをなぜヤミ米にする必要があるんだというような団体交渉があったんです。朝鮮人側と県との交渉で我々も立ち会ってそのことを知りました。もうひとつ、秋田で朝鮮人が暴動を起こして、八〇〇人ほどがストライキをやりましたが、そのときもやっぱりもらっています。

―M　ぼくは当然だと思います。帰っていく人たちは、帰る途中の食料を確保しなければならないわけですから。しかし、全部が帰らないで、一種、利権化していく、ヤミ米化していくという問題は、当時のものを読むと、けっこう出てきます。

朝鮮人帰還のための特別列車

―M　敗戦直後、朝鮮人が下関とか、帰れるところへドッと行くために特別列車を仕立てたのですが、それが日本人との間で軋轢を起こしていたという記事がありますが、実際はどうでしたか。

遠藤　言われるような軋轢ははっきり言うとないんです。むしろ列車が空いている限りは、集団で下関とか博多とかに行きたいという場合、臨時列車を勧めていました。逆に日本人が舞鶴から引き揚げてくる場合、鉄道は、その帰りに舞鶴に回ることを一生懸命やったはずです。

―H　ぼくは戦争中右翼で、敗戦直後も若干それが残っていて、一九四五年の一一月に山口県の神道団体の講習会に行きました。そのときは、特別列車じゃなかったんですが、ほとんどが朝鮮への引き揚げの人たちで、網棚にも寝ているし、足の踏み場もない状態でした。朝鮮人の引き揚げのエネルギーに圧倒されて、その講習会では、すっかり醒めてしまいました。特別列車もありましたが、ともかくすごい混雑だったのです。それがしばらく続きました。

―M　朝鮮人が優先的に乗せられたということだったのでしょうか。

遠藤　それは切符の問題です。日本人は切符を入手するのが困難でしたが、朝鮮人は戦勝国といったらおかしいが、団体交渉で切符をうまく買ったんです。

―E　宮城県でも、帰りたい人はみんな仙台の朝連の窓口に行ってキップをもらいました。

隠退蔵物資摘発運動と朝鮮人の協力

遠藤　敗戦から一九四七年の二・一闘争まで、たとえば、国鉄労組の立場からだと、隠退蔵物資摘発運動というのがあったんです。仙台にも航空廠があって、その倉庫には大豆がいっぱいあったりしましたが、それを摘発しました。また、日本陸軍が、蔵王のふもとの農家の蔵などに、建築資材と称してバターや缶詰などの食料物資を隠していました。その情報をよく知っているのが朝鮮人だったんです。釘などの建築資材は、国鉄が引き取って、その後の鉄道建設の基本材料にしましたが、報せてくれた朝鮮人たちには、食料などの物資を、ある程度まとめてポンと渡すということはよくありました。

高橋　共産党が最初に手をかけたのは、隠退蔵物資の摘発でした。全国的にやりましたが、それを一生懸命手伝ってくれたのが朝鮮人たちでした。

遠藤　そして、情報をよく知っていました。

―M　もしかすると、アメリカ軍が朝鮮人に

情報を流したということがあるのではないでしょうか。GHQが最初日本の軍事物資の処分についてやっていて、実際の兵器になるものは破壊しているわけですから。

「占領軍＝解放軍」に対する疑問

―H　戦後のある時期、共産党も朝連も占領軍を解放軍と規定したのは確かですが、この規定についての疑問は、二・一スト以後に起こっているんじゃないですか。

高橋　それは当然です。ただ、疑問は起こったけれども総括もできずに、自己批判しないまま来てしまいました。

―E　朝連本部では一九四六年はじめに、すでに疑問が出ていますが、宮城県では、その規定は長く続いていると思いますが。

遠藤　ただ、私は二・一闘争まで国鉄の労働運動をしていましたが、「一九四六年五月一五日の」連合国対日理事会でGHQ外交局G・アチソンの反共声明が出たのをきっかけに、「解放軍じゃないぞ」という声が出て、すくなくとも労働組合は全部警戒しはじめました。

―E　でも、宮城県では、表面上来軍とすごく仲がよくて、一番はじめの頃は軍から車をもらっていたりしています。朝鮮人のところに米軍が来て、ドブロクを飲んだり、一緒に食べたりしたという記事もあります。国旗掲揚事件以後ずいぶん変わったんですが、軍の行動について抗議に行くと、彼らはすごく戸惑ったという話があります。

遠藤　そうかも知れません。

朝鮮人と日本共産党

―H　ところで、共産党に在日朝鮮人が党員として多く入ったのは、敗戦直後からですか。

遠藤　そうですね。

―H　敗戦直後、在日朝鮮人が党に入ることに疑いがなかったんですか。

遠藤　宮城県党委員会なども朝鮮人に支えられたことが非常に多かったんですよ。日本人党員といっても戦前からのはほんの一握りで、ほとんどはティーンエージャーだったんです。だから、党員の家を訪ねても、囲炉裏を囲む横座にはおじいさんなどがいて、「家の孫がとんでもないところに入って」というのが一般的でした。

―H　コミンテルンの時代に、植民地の朝鮮人たちもコミンテルン日本支部に入ったんですが、そのなごりではありませんか。

―M　なごりというより、その延長線でしょう。政治犯の釈放運動は、すでに敗戦の年八月に、金天海が命令を出して釈放同盟を作っています。カナダのE・H・ノーマンなどもからんでいます。だから、刑務所から出てくるのを迎えるのが朝鮮人というのは、ごく当り前です。

遠藤　私は敗戦まもなく党に入ったんですが、いつも党関係の集会に集まるのは、川崎・鶴見の朝鮮人が圧倒的で八割ぐらいでした。

―M　宮城県の朝鮮人党員はどのくらいですか。

遠藤　正式に党員になったのは少ないんです。今でも不思議に思います。しかし、彼らは我々に全面的に協力してくれました。朝連を通じての指令だと思います。

―R　共産党は、日本の階級闘争にまず勝って、それから、民族問題を解決しようと考えていたと思いますが、当時、党は朝連とどういう関係を結ぼうとしたのですか。

遠藤　朝連の幹部で、党員になる人は非常に少なかったのです。私が県委員長になってか

らはやめましたが、それまで演説会などでは、入党申し込みをばらまいていました。そうすると、日本人の場合、忠君愛国に燃えていた人まで、流行みたいに入党したいといってきます。そのときには、「外で応援してくれるだけで結構」と断わったことがあります。また、仙台一中の一クラス五〇人のうち三〇人ぐらいがまとめて申し込んできたので、これも断わったことがあるんです。

高橋　私は一九四七年一一月から約一年、県委員会の事務局にいました。そのとき、党員名簿をまかされていましたが、当時、労働組合員を除いて党員は三〇〇人しかいなかったんです。そのうち、朝鮮の方は二〇人。朝鮮の方々に入党を勧める指示もなかったし、我々もしなかったんです。県下に朝鮮人は、六〇〇〇何人いて、そのうち二〇人ですが、それ以上、後にも先にも増えませんでした。

―M　それはやっぱりずっと疑いの気持ちがあったということでしょうか。

高橋　残念ながら、私は、党の組織内で差別意識がなかったとは言わない。非常に私はそれが悔しいです。積極的でなかったということは、そういうところにありました。私たちも朝鮮の方々も米軍を解放軍と思っていた一九四六、七年までは、彼らは、我々を完全な味方として、党にすべてをまかせたわけですが、その間、我々のほうは、積極的でなかったんです。残念ながら、一つの不信の念もあったでしょうし、長年の差別意識が党のなかにもあったんですね。

―M　一九四九年から二回、共産党のなかで対朝鮮人政策の総括がありますが、そこで、今までは少し請け負い的闘争だったということが出されたと記憶していますが。

高橋　それは事実です。世話役活動ということで。積極的に彼らの地位をこうしてやろうとか、国内でこうしてやろうとかいうことが、党には全然ないのです。だから、私は、党に対しては憤りをもっていました。口にはあまり出さなかったんですが。

遠藤　朝連のキャップ金天海さんの話ですが、共産党の政治局員でもありました。彼はいろいろな会合では一番発言権を持っていましたが、私も拡大中央委員会などに何回か出たんですが、会議で彼の発言を聞いたことが一度もない。目を閉じて寝ているような感じでした。金天海さんが何かの発言をすれば、下部にいる私たちはオウム返しで勉強したのですが。金さんに最後に会ったのは、新橋の街頭でした。彼は小さい声で「私は明日祖国に帰る」と言いました。その後朝連が帰国者を集団的に組織しましたが、当時は全部密航でしたので、私は驚いて「じゃ、お元気で、気をつけて」と言って握手して別れました。それが最初で最後の言葉だったんです。

高橋　県でも地区でも、朝鮮問題を正式の議題に乗せたことが一度もないんです。したがって私自身の責任で、請け負い主義かもしれませんが、基本的には贖罪意識があるので、とにかく一生懸命に走り回ったんです。

―E　県の承認、委員長の了解を得て、個人的にやったということですか。

高橋　そうせざるを得ませんでした。遠藤委員長の前任に川原清秀という人がいたんです。川原さんが辞めて遠藤さんが委員長になりました。川原清秀さんが委員長のときは、彼一人で、朝連の関係をしていました。私は彼のもとでも役員をしていたんですが、それを全部教えてもらって引き継いだのです。この人は、戦後から朝鮮の方の世話を一生懸命にやりました。党から除名され、いろんな苦労を

しましたが、お金がなくて、いろんな店を開いたり、屋台をやったりもしました。その資金は全部、朝鮮の方々からだったんです。それだけ一生懸命やった方だったので、私の活動も個人的に応援をしてくれました。

―R　ちなみに、当時、金東明さん［金興坤さんの別名］という方はいましたか。

遠藤　ああ、入党していました。数少ない党員だったんです。

高橋　金東明という名前ではないんですね。だが、遠藤委員長がいたと言うのなら、いたのでしょう。

―E　彼が一九四九年ごろ除名されたと言いました。

遠藤　数少ない朝鮮人党員の除名のことは、私は知りません。除名というのは、全部、党の中央にいた、政治局員だった金天海さんとか、朝鮮人部長の朴恩哲さんがやっていました。金天海さんは全国を歩いて党員を増やしていましたが、宮城県の段階で朝鮮の方の除名は私の記憶に全くないんです。

話が変わりますが、朴恩哲さんは佐藤さんという日本人と結婚していたんです。彼女はクリスチャンで、「共産党のお母さん」と呼ばれていました。党本部に堂々と出入りしたのは佐藤さん一家ぐらい。彼女の兄弟が朝鮮の方と結婚して、それで北に行きました。一昨年、奥さんから連絡があって、一〇年ぐらい前に朴恩哲さんが行方不明になったと。金天海さんは朝鮮労働党の統一戦線部長までは華やかだったんですが、その後、だんだん消えていきました。年齢的にも亡くなっているでしょう。

高橋　朴恩哲さんだけは、一九五一年の軍事方針のもとで、終始主流派でやりました。当時、民対部［民族対策部］の部長でした。

朝連から民団への動きのなかで

―Y　朝鮮人には日本人とは違った固有の理念なり問題があるということについて、日本人党員なり日本共産党はどういうふうに考えていましたか。つまり、日本人側は、彼らの党行動は、日本人党員と一緒のことを目指していくべきだと考えたのですか。あるいは、彼らには別の問題があるのだから、同時進行はまずいと思っていたのですか。

高橋　そういう論争自体がなかったんです。私の知っている範囲では、国旗事件が発生する以前はそういう積極的なものはなく、朝鮮民族に対する同情心でした。私は贖罪的な意識で取り組んだんですが、そういう意識は党全体にはありませんでした。私も第六回党大会に代議員として委員長と一緒に行きましたが、そのときも問題にもならなかったし、どの分科会でも議題にならなかったんです。

―M　関心そのものが薄いということだったんですか。

遠藤　それもありますが、もう一つ、朝鮮の人でもちろん南も北も同じなのですが、祖国建設ということをきちんと言う人は、国旗事件の前からどんどん北朝鮮へ行っていたので、私たちは拍手するだけでした。

高橋　それと、国旗事件以降一九四九年から、朝連から民団へ人が移っていくということも出てきます。仙台一のキャバレーを持っていた朝連の元副委員長が民団に移りました。そして、怒った朝連側の人がその人を殺すという大事件が起こったんです。そんなこともあって、当時県党としては、おっかないと言えばおっかなくて、積極的な働きかけはできなかったんです。民団は［吉田茂の］民主自由党を通して献金をしていましたし、GHQと組

んでいるだろうということも、証拠がなくても、薄々分かりました。そういう疑心暗鬼も党全体に出てきました。我々は個々の朝鮮人といろいろ接触して、寝泊まりして一緒に飯を食っていましたが、そんな連中がみんな民団に行ってしまうので、悲しかったんですよ。だけど、民団であろうと朝連であろうと、自分の祖国を守ったのだから、我々は耐え忍んだけれど、非常に矛盾した気持ちがありました。

GHQの矛盾

―M　戦争直後の民団は、概して、ある意味では、きちっとした独立運動を考えていたと思いますが、それが李承晩になっていくころから、だんだん変わるのではないでしょうか。

高橋　余りにも急に変わったので、これではおつきあいできないなと思ったんです。

―E　大阪とか東京とか兵庫とは違って、宮城県はすごい変わり方でしたね。

遠藤　だから、国旗事件の責任は大きい。

―M　国旗をあげてもよいと言ったことの責任ですか。でも、青年の血気もあったわけですが。

遠藤　だからこそ、そうなったといえばそれまでです。

―E　やっぱり、GHQの狙いが当たっています。資料によると、仙台ではMPはあまり出ていないんですが、このとき初めて出動しています。

―M　今日初めてうががったことですが、米国の労働組合員だった兵士が赤旗を振って共産党を支援したという話は、ぼくは後にも先にも聞いたことがありません。

遠藤　土曜日か日曜日かに、米兵が仙台駅前で集合して、隊列を組んで県委員会まで来ていました。

―M　そういうのをかかえた第八軍というのもあったわけで、GHQだって一枚岩ではなかったんですね。だから占領軍内部の矛盾もあったのでしょう。宮城の特徴的な動きには、こんなことも意外と関係しているかもしれません。

党の分裂、軍事方針と朝鮮人

遠藤　［一九五〇年六月二五日に］朝鮮戦争が勃発した。そして一九五〇年一月のコミンフォルム［共産党情報局］批判をへて日本共産党の分裂［国際派と主流派］が起こりました。それから北朝鮮から「後方撹乱」と称して、日本に密航して来た方が多かったんです。主流派が握っていた代々木の党本部にも行きましたし、私たちの国際派にも来ました。当時［日本にいる］朝鮮労働党の党員は立派だなと思って、尊敬できる人が多かったのですが、朝鮮戦争でそういう人たちが全部日本国内から姿を消して行きました。その後、「後方撹乱」で来た人たちにはホトホト参ってしまいました。彼らは麻薬を持ってきたり、日本の重要な拠点を爆破するんだと言ったりして、いくら何でもという気持ちでした。九州地方の党財政部をやっていた作家井上光晴さんは、旅費とか食費として麻薬をもらったんですが、共産党が麻薬を扱うとは何事かということで、みんなトイレに捨ててしまったのです。また、トンネルなどを爆破すると言うんですが、共産党臨時指導部の議長だった椎名悦郎は、とんでもない話だということで、爆破のために設置した爆弾を解除し、ストップをかけたこともあります。

―M　向こうから来た人たちは日本語がしゃべれますか。

遠藤　しゃべれません。通訳がついていまし

た。朝鮮戦争の関係で、占領下日本にある米軍の基地を爆破するためにみんな来たのです。高橋　党［の主流派］は一九五一年以降、軍事方針を出して、火炎ビンを投げたり、警察署、交番を襲ったりしたのです。そのとき、朝鮮人労働者が多くを担いましたが、党が全部指導しました。遠藤さんは国際派でしたが、我々は主流派にいて、党内の分派闘争に没頭していました。分派闘争に明け暮れてどっちが権力を取るか、ということだったんです。その後、軍事方針が出て、いろんな事件を起こしてしまいました。そのとき、朝鮮から潜入して来た方々がいたということは、我々も知っていました。

それで、「中核自衛隊をその地区から何名を出せ」という指令が来まして、火炎ビンが何本という具合でした。それを一生懸命造ってくれたのは朝鮮人、朝連系の方々。それを運んで行ってくれたのも朝鮮人。そういう運動をやったのも残念ながら事実です。そのために日本共産党は壊滅的な打撃を受けて全部崩壊してしまいそうになりました。私は主流派だと言ったのですが、正確に言うと、主流派ではなかった。どっちでもありませんでした。あの軍事方針にはきわめて批判的でした。だから、「プチブル分子」と言われて大変いじめられました。

おわりに

三時間にわたるお話では、最後の発言にも見られるように、いくつかの仮説や問題意識が新しく生まれた。そして、言うまでもなく、いくつもの事実や視点に出会うことになった。

本研究会メンバーの多くの問いかけに対して、おふたりには、当時の記憶を想起してもらい、率直かつ誠実な応答をしていただいた。その際、当時における種々の苦悩や矛盾を語らなくてはならなかったし、それゆえ、ときに、想起それ自体がご苦闘であったと察せられる。

私たちが「思い出したくないことを話していただいて……」と謝意をあらわすと、高橋さんは「本当、本当、思い出したくなかった」と結ばれた。

改めて、感謝したい。

（篠原陸治）

〈注〉

＊1　三・一五事件――公然と政治活動をはじめた日本共産党に対し、一九二八年三月一五日、治安維持法のもとで党幹部千数百名を逮捕し、約五〇〇名を起訴した弾圧事件。その後、党は地下活動を余儀なくされた。

四・一六事件――一九二九年四月一六日に起きた共産党幹部の大量検挙事件。「第二次共産党事件」とも呼ばれているこの事件は、党組織に大打撃を与えた。

＊2　松川事件――一九四九年八月一七日、福島県松川駅近くで列車が転覆し、三名が死亡したことで、国鉄労組員数名が破壊活動行為の疑いで逮捕された事件。

同事件は、同年七月五日の下山事件、七月一五日の三鷹事件に連座するものとして国鉄労組や共産党に対する「デッチあげ事件」とも言われ、世論は大きな関心を示し、吉田茂内閣と労働運動との緊張関係をいっそう高めたものである。

なお、吉田首相が、根拠がないのに下山事件が朝鮮人の破壊分子によるものだとアメリカ高官に強調したことからもうかがえるように、その二大事件は在日朝鮮人社会にも波紋を投げかけた。

1、評定河原事件

昭和二十三年十月十一日、十二日の両日、仙台市評定河原グランドにおいて在日本朝鮮人連盟（朝連）と、在日本朝鮮民主青年同盟（民青）、東北地協との合同主催、朝鮮人民共和国中央政府樹立の祝賀式と、これを記念しての運動会が開催されたが、この時主催者が掲揚を禁止されている北朝鮮人民共和国国旗を使用したため、仙台市北署員とMPが実力で使用を制止し、この際MPに抵抗した朝鮮人一名がピストルで腹を撃たれて負傷、三名が進駐軍指令違反で現場検挙された事件である。

二十三年（一九四八）九月八日、朝鮮最高人民会議は、金日成を首班に指名し、九月九日正式に朝鮮民主主義人民共和国政府樹立を内外に声明すると、北鮮全域に人民共和国政府樹立慶祝人民大会が繰り広げられた。これに呼応して在日朝鮮人民青本部も十月十日を朝鮮人民共和国樹立慶祝大会と決め、この日を期していっせいに共和国国旗を揚げ、全国民青を動員して示威行進を展開することにした。民青宮城本部は十月十一、十二日の両日にわたって、この祝賀大会を開催することを決め、十月九日朝連県本部から仙台市警に対し大会を開催する旨の届出がなされた。第一日の十一日は、午前十時ころから評定河原グランドに朝連民青東北地協（北海道を含む）代表など、五百余名が参加して開会式が始められた。このとき既に会場正面にアーチ、来賓席などには使用禁止となっている北鮮人民共和国国旗が高々と揚げられていた。このため宮城政府、〔第八軍第九軍団の宮城県軍政チーム〕司法課長ボズウェル大尉らが臨場するところとなり、大会準備委員長徐萬奎ら責任者にすぐ撤去するよう命じた。ところが責任者は「北鮮政府の国旗ではない、南北鮮統一の朝鮮人民共和国を象徴する国旗だ」などと言を左右にして応じないため、午前十一時二十分頃、仙台市北署に待機中の制服部隊平山勝則警部以下二十名が出動、警告を発して午後零時十分ころ降下させたが、午後一時ころ再び掲揚したので再度制服部隊が出動して警告し、午後二時五分国旗を降下させ、その後もスムーズに運動競技が進行して、午後五時三十分ころ予定どおり行事が終了した。

第二日も約五百名が参加して午前十時五十分頃から運動会が開催されたが、幕内には紙製の北鮮国旗が貼布されてあったし、問題の国旗は掲揚を取りやめた代りに、約十名の者が五人一組となってスクラムを組み、頭上に捧げ持って会場内を行進し出した。これらが警備中のMPの目にとまり、直ちに幕内の国旗ははがされ、行進も中止させられて責任者の金景河、朴陽鳳ほか一名の幹部が宮城軍政府に連行され、厳重な警告を受けた。この騒ぎで運動会の行進はいったん中断されたが、午前十一時三十分ころ競技は再開され、その後は全く順調に行事が進んで、午後四時三十分頃賞品授与式と閉会式に移った。ところが観覧者の中から飲酒した者が数人出て会場内を徘徊放歌し始めると、これに和する者が出始め場内にわかに騒然となった。やがて活動的な民青らの煽動によって参加者全員はスクラムを組み、朝連旗、赤旗をふるって気勢をあげ、グランド内をデモ行進し、円陣をつくって熱狂した。このとき、たまたま数名のものが問題の国旗を持ち出してデモ行進を続けようとしたので、監視中のMPは直ちに使用禁止を命じた。しかし熱狂した数名は警告を無視して行進を続けたためMPが実力でこれを阻止し、持っていた国旗を

押収するとともにその国旗を所持していたと見られる塩釜市［中略］李玉伊（二三歳）、［仙台市］［中略］金性洙（三二歳）をその場で逮捕した。またこのとき混乱の鎮圧に当たっていたMPに抵抗し職務を妨害したという青森市［中略］金四岩（二一歳）は、MPにピストルで腹部を撃たれて逮捕され、責任者の仙台市［中略］朝連県本部委員長金景河（四三歳）も同時に逮捕された。

仙台市北署から当日三十名ほどが警備にあたっていたが、本事件については専ら混乱の収拾に努め、午後五時三十分頃退去命令に従わせて全員穏かに退散させた。

MPはこの北鮮（ママ）旗掲揚事件を重視して、その後も捜査を続け、さらに翌十三日早期仙台市［中略］朝鮮連県本部書記李順基（三二歳）および仙台市［中略］朝連県本部社会部朴陽鳳（三二歳）を逮捕し、逮捕者は六名となった。

このうち金四岩と李玉伊の二人は後に第九軍団軍事裁判所で両者とも重労働三年の言渡しを受けた。

＊出典は、仙台市警察史編纂（さん）委員会編『仙台市警察史』玉文堂、一九七八年、297～299頁。